

環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

A Study on Environmental Art and Design —The social function and Possibility—

高須賀 昌志 (教育・助教授)

TAKASUKA Masashi

1 研究の目的

本研究代表者はこれまで、「制作者の一人」として環境芸術（パブリック・アート）の制作及び調査・研究を進めてきた。そのなかで、環境芸術が持たなければならない社会性や公共性、市民との高いコミュニケーション能力が要求される必然性などを明らかにしてきた。本研究はそうした特性が現代社会においてどのような役割を担い、環境芸術が触媒としてどのような作用を促すのか、また、その可能性が今後どのように広がっていくのかということについて明らかにしようとするものである。

表象芸術は個の美的価値を様々な表現媒体によって創造・表現しようとする人間の活動であり、人間の所産である。作者の言葉にすることの出来ない思想、主張、心情、気分、などを表現・伝達する手段の一つとして存在している。また、「気」「雰囲気」「気配」「ムード」「暗示」など人間の五感を対象とした表現行為であると捉えることができる。環境芸術はその成立の前提として、そうした表象芸術が持つ本来の機能を、公共性、地域性、それらの目的性がゆえに顕著に具現化し社会的機能を果たしている。表象芸術のなかでも環境芸術は最も社会と密接かつ恒常的に関係が存在する。従来 of 表象芸術の領域区分が表現媒体によってなされていたことに比較し本研究では環境との関係に焦点をあて、社会との関係性や、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によっておこなうことによって、「場」に対する影響力、そこに関わる「人間」に対する浸透力を実証し、現代の社会環境を形成する上で重要な役割を担っていることを明らかにしようとするものである。

2 研究経過

■本研究に関連した研究

●科学研究費補助金

基盤研究 (C) 期間：平成17年度～平成19年度 課題名：環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

若手研究 (B) 期間：平成14年度～平成16年度 課題名：実践に基づく美術教育における鑑賞教育の研究 —環境芸術を題材に—

●埼玉大学総合研究機構研究プロジェクト

若手研究 期間：平成17年度 (9月～3月) 課題名：環境芸術の研究 —社会的機能と可能性—

■研究経過及び研究成果

国内外の事例について検証を進め、その過程において環境芸術の在り方について当初予想していた以上の幾つかの修正を余儀なくされている。その修正とは、「芸術」という定義を従来の表象芸術で語られるところの絵画、彫刻といった純粋芸術に留まらず、デザイン、建築といった明確な機能を有する領域のものについても環境芸術の視点から社会的機能を持つものとして評価が必要になってきている点である。このことは美術教育における鑑賞プログラムの構築において多分に反映されているところである。現代の社会はグローバルな情報化とともに地球全体が多様な文化や地域性を尊重し、多元的な価値観について相互理解を図ろう

とする時代になってきている一方、政治、経済、宗教などの差異からおこる諸問題において、干渉し、衝突するという矛盾を孕んだ社会となっている。こうした複雑で問題の解答が定まらない社会環境のなかで、「環境芸術」＝「社会と密接に関わる芸術」が、新しいコミュニケーションを創出することによって重要な指針を社会に提示するという事例を数多く確認することができた。これは、ある特定の地域や、ある特定の社会状況下での環境芸術に留まらず、社会全般に通底する問題を浮かび上がらせ、環境芸術の社会的機能をはつきりと示すものである。こうした観点を鑑賞教育のプログラム構築に活かし、二年間を通じた実践授業によって検証をすすめてきた。その結果を「鑑賞教育の研究-環境芸術を題材に-」にまとめ、大学美術教育学会誌において中間報告をおこない、(平成17年3月発行) 具体的(現実の環境芸術を対象とした)な鑑賞プログラムの実践結果について分析・検証をすすめている。また、表象芸術のなかでも環境芸術は最も社会と密接かつ恒常的に関係が存在するものとして従来の表象芸術の領域区分が表現媒体によってなされていたことに比較し、本研究では環境との関係に焦点をあて、社会との関係性や、地域文化・風土との関わり、具体的な実社会への反映という観点によって分析を進めている。

3 研究成果

本研究は上記のような研究経過を得て最終的に科学研究補助金による同課題の研究と連関させ、平成19年度末に『環境芸術』を総論としてまとめる予定である。よってここには、これまでの研究で得られた成果のうち、特に「環境芸術とは何を指し示すか」という問題について、考察の一端を示す。また、研究をすすめていく上で当初の予定になかった新たな観点について提議し、今後の研究の広がりについて記し、報告としたい。

「環境」で括られる芸術

1960年代から世界的に「環境」という言葉が、芸術・デザインに結びつけられながら語られてきた。近代の芸術・デザインが新しいパラダイムを確立していった過程のなかで、専門分化が進むにつれて総合的な視点を失っていった時、「環境」という概念が導入された。1970年代以降、地球的視点から環境を見つめ直す立場が支持され始め、いわゆる大量生産大量消費によってもたらされる石油エネルギー資源枯渇や環境汚染に対する関心が高まった。さらに人類が宇宙空間から青い地球の姿を認識しバックミンスター・フラワーの先駆的哲学に基づいた「宇宙船地球号」としての地球環境が把握され始めたことが、新しい環境観を育てることにつながった。一方、社会のコンピュータ化、地球規模での情報化が始まり、20世紀後半以来、情報技術革命が進み自然環境と人工環境のみならず、電子的環境に包まれているという、新しい人間の姿を確認しなければならなくなった。

環境芸術とは、従来パブリック・アートといわれてきた公共空間における彫刻や壁画等の表現領域に留まらず、現代の社会関係(問題)に照らし何らかのアプローチを試み、問題提起し、解答を得ようとする芸術における表現行為を総て包含するものを意味している。これまでパブリック・アートが持たなければならぬ社会性や公共性、市民との高いコミュニケーション能力が要求される必然性について明らかにしてきたが、環境芸術にも、表現媒体に関わらず、その成り立ちや機能において同様の働きが求められると考える。「環境のために生みだされた環境芸術」「市民のために生みだされた環境芸術」はパブリック・アートと同じ目的性を持つが、それに加えて「環境をつくる芸術」「結果として社会環境の一部を形づくる芸術」あるいは「環境をテーマとした芸術」「社会環境の中に存在する者が生みだす芸術」といった、環境と芸術とが、俎上にのぼる表現に関して、ひとまずここでは環境芸術と解釈したい。

そもそも芸術は個の美的価値を様々な表現媒体によって創造・表現しようとする人間の活動であり、人間

の所産である。その創造・表現過程において、「環境」という問題に関わりを持っているもの、あるいはその活動・所産が「環境」という問題に関わりを持っているものを「環境芸術」と表したい。「環境」が意味するところは、人間をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界を示している。都市環境、自然環境、地球環境、宇宙環境と視点の位置によってその視野は無限に拡大していく。その相互作用を引き起こす媒介は、ここで主題となっている造形芸術に加え、表情芸術、音響芸術、言語芸術さらには時間芸術、空間芸術とその幅を広げている。美的価値の創造・表現行為において「環境」という問題を俎上にのせるといことは、そこにはっきりとした環境に対する企図があると考えることができる。いわゆる「芸術のための芸術」に対し、何らかの人間の意思が環境に対してはたらいっていることになる。また、「芸術のための芸術」であっても、それを第三者によって環境のために活かそうとする意思がはたらいっているものであれば環境芸術の範疇に入ると考えられる。また、はじめは環境に対して直接的な企図がなされていなくても、結果としてそこに社会環境に対する何らかの影響やその構成因子と考えられるものも含まれていくと考えることができる。このように考えていくと、人間によって創造されたものはすべて環境芸術と考えられなくもないが、環境芸術とは、それをとらえる側が環境に対して何らかのつながりを見出すことができるものとして考えていきたい。

環境芸術としての建造物

建築もまた、芸術の一領域である。建築はその前提として、人間を取り囲むものとして環境を形成する要素として存在している。また、建築の集合体が都市環境を形成すると考えれば建築家によってつくられる建築物は当然、環境芸術としてとらえることができる。人間環境をつくる芸術の一領域としての建築が環境芸術に含まれることは至極当然のことであるが、さらに観点を変えて考えてみたい。通常、街をつくった、国をつくったという文脈からいえば、それは政治家や時の権力者がつくったということになる。街はずれの神社やお寺にもその成り立ちにはそれなりの謂れはあるはずだ。これら歴史に見られる巨大な都市計画も身近にある神社仏閣にも、その当時の美意識や叡智が結集されているものとして把握できる。同じ視点で考えれば身近な土地に残った過去の人間活動の痕跡である遺構もそうであろう。歴史的背景を負っているということでは遺跡や城址もその範疇に入る。第二次大戦後につくられた平和記念（広島や沖縄など）に類する施設や慰霊碑、戦（いくさ）にまつわるものとしては戦国時代や明治維新时期に関連したものは日本中に点在している。ここで歴史上重要な建築物ばかりを取り上げるつもりはない。成り立ちや背景を知り得る手だてがあり、その当時の美的価値によって創造されたと考えられる人間の所産として環境芸術として捉えることが出来るということだ。歴史的な意味での軽重や美的な価値だけを問題にするのではなく、その風土や文化における地域との関わりの深度について問題にしたい。現代に目を向ければダムや架橋のような構造物、船や飛行機などのその時代に応じた技術と美意識の粋を結集した建造物などその対象はさらに広がっていくと考えられる。建築物や建造物は外側から佇まいを眺めるだけでなく、その内部に立ち入り、空間を全身で体感することが可能である。目で見るだけでなく、足先や手によってその感触や肌触りを確かめ、反響する音を聞き、皮膚によって湿度と温度を知り、その場の空気を吸う。五感を総動員させて自らの感覚を覚醒させるはたらきを持つ。これらのことから環境芸術には従来の表象芸術における絵画や彫刻とは異なる作用が期待できると考えられるのではないか。

環境芸術としてのデザイン

我々の生活環境にあふれるモノは、そのほとんどが人間によって構想され、デザイン行為の結果として生みだされている。身の回りを見渡してみてもデザインされていないものを探すことのほうが難しいであろう。

優れたデザインは絵画や彫刻の名品と同様に後世に残すべきものとして美術館に収蔵されるものも少なくない。日本におけるデザインは戦後、高度経済成長と歩みを同じくして急速に発展してきた。世界をリードする分野も少なくない。しかしながら経済の驕りとともに日本のデザインも曲がり角にきているようだ。世界的に見ても地球環境と人間がつくり出すモノとの関係は臨界点に達している。デザイン行為をおこなう者は必然的にモノをつくり出す側の加担者の一人となる。地球環境の悪化が叫ばれる時代にあつてその責任は重い。しかしそうしたデザイン行為をおこなうものだけに責任がある訳ではない。実は本当の責任の所在は、我々消費者にあるのだ。デザインを評価するとき、今まで「有り様」つまり外見の善し悪しや、「キレイ」「カッコイイ」最近では「カワイイ」という観点が幅をきかせているが、そうした造形上の表層的な問題について重心が偏っていたように思う。しかし本来デザインは極めて多岐に渡る諸要素をどのように統合し、いかに最上の答えを導き出すかという社会環境と緻密に関係を紡いでいく行為である。モノの「有り様」に対し環境における「在り方」が問われる時代になったのである。このことは当然「美」という観点のみでは解決されない。科学、工学、経済に加え哲学、宗教までもがその机上に上らねばならないだろう。デザインされたモノを考えると、「美」や「用」に対する価値評価とともに、必然的にこの「在り方」について考えていくこととなる。この「在り方」は、まさしく環境芸術をとらえる視点と符合してくる。デザインは芸術に比較して決して劣ることのない美的価値を様々な媒体によって生み出す人間の行為による所産である。その過程には必ず「環境」という問題との照応がありその関係を紡ぐ行為であるといえる。デザインは現代社会を形成している最も身近な環境芸術であるといえる。

4 今後の研究について

風土との関わり

山折哲雄をはじめとする国際日本文化センターで研究されている『環境と文明』[※]についての議論や『文明の環境史観』^{※※}によって示されている文明と風土との密接な関係性を考えると、文明と文化を同列に考えることは出来ないながらも、文化の大部である芸術においてもまた、地域性や気候風土との強い関わりについて考えないわけにはいかない。しかしこの歴史学的視点を本研究においては美術史的なものに置き換え環境芸術を分析していこうとする方法論の問題としてではなく、「環境から文明を考え、人類の将来にとって持続可能な文明とはいかなるものであるのか」という使命感を含んだ思考の道筋と同様に、「環境から芸術を考え、あるいは環境と芸術の“関係”について考えること」が、表象芸術の将来像を導き出す一つの重要な手だてとして考えられその道筋を示すものとして重なってくるように感じている。

グローバリゼーションが叫ばれながら一方ではローカルな地域の風土に根ざした文明論が注目されているのを見て、今後益々表象芸術においても『環境』というキーワードが重要なテーマになっていくであろうことを（直観的にはあるが）確信している。『環境』というフィルターを通すことは、その表現は必ず社会性を帯びていくことであり、コミュニケーションという観点でいえば、表象芸術の中にあつて極めて高い疎通力を持たざるを得ない媒体であることは間違いないであろう。『環境と文明』の議論に触れ、あらためて『環境』という言葉の持つ意味について精査する必要があるとともに、現在までの環境芸術が何を成し得てきたのかということについて、特に風土という観点において再考をする必要を感じているところである。

※ 『環境と文明』山折哲雄編著, NTT 出版

※※ 『文明の環境史観』安田喜憲著, 中央公論新書